

ローザ・ルクセンブルグに関する覚書

八木沢 二郎 始稿 2016 年・2020 年 1 月 3 日改稿

(I)

私は、ずっと昔にローザ論を書いた。('ドイツ革命の敗北とローザ'～機関誌『戦士』社学同関西地方委 1964)そこで言いたかったことは二つあった。

一つはロシア革命やその後の中国革命のような「後れた国」での革命＝永続革命タイプの革命にたいして先進資本主義下の革命のどのようなものかという点である。

レーニンやトロツキーが「ロシアのような国では権力を取ることは比較的容易いがその後の社会主義建設を行うことは困難を伴う、逆に先進資本主義国では権力をとることは困難だが建設は比較的容易い」とコミンテルン3, 4回大会で述べ、グラムシが意識的に「東方—西方」「市民社会がゼラチン状で国家が全てである国と市民社会が発展した国」それに対する革命戦術としての「機動戦と陣地戦」として取り出したもの—この問題を第一次大戦後のドイツ革命にそくして検証しようとした。

二つは、その中でローザの革命論をマルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」にはじまる革命論の系譜の中に位置づけ批判的に検証することだった。

この作業は私にとっては、経験した60年安保闘争とその中での第一次ブントの役割その革命思想の限界(急進主義の肯定と否定)をローザ批判(共感と否定)と二重写しに行う私にとってはシリアスな作業でもあった。

(II)

近年ローザは新自由主義の跋扈のなかで再評価とまではいかないにしろしばしば引き合いにだされている。例えばD・ハーヴェイはその「ニュー・インペリアルズム」(青木書店)でしばしばローザを引き合いにだして彼の「拡大再生産による蓄積」と「略奪による蓄積」の区別(と連関)を論拠づけている。この考えは、それ以降の「新自由主義」や「資本の謎」の主調音をなしている。

ローザ・ルクセンブルグによれば、「資本蓄積は二重の性格を持っている。ひとつは商品市場と余剰資本が生産される場…この点から見れば、資本蓄積は純粹に経済的なプロセスである。もう一つの側面は、資本主義と非資本主義的生産様式との関係にかかわっており…この面で資本蓄積が主に採用する方法は植民政策であり、戦争である。共生、詐欺、略奪が何ら隠蔽されようともせず公然と行われる」(「インペリアルズム」P139)この引用は(翻訳書ではローザからの引用か、ハーヴェイの言葉か不明な引用の仕方だが)まぎれもなくローザからの引用である。「資本蓄積論」(岩波文庫、下巻P196)

そのうえでハーヴェイは「分析のためには、ルクセンブルグの整理がきわめて有効だろう。資本蓄積はたしかに二重の性格をはらんでいるが、拡大性生産と略奪による蓄積というこの二つの局面は、有機的に連関しており弁証法的にも絡み合っている。」

(「ニュー・インペリアリズム」P177)

このような分析視角は、まさに新自由主義の跋扈とともに登場したといっている。
何故ならケインズの福祉国家全盛期—それは耐久消費財を中心とする日常的な「拡大再生産による蓄積」の時代(先進資本主義国では。言うまでもなく植民地、新植民地支配による「略奪による蓄積」がこの時代も行われたことは石油だけとっても明らかだが)であったのに対して新自由主義の時代は、世界の隅々まで資本主義化し極端な低賃金をはじめとする搾取が行われ、公(共)の資本主義化(私化)が略奪的に推し進められているのである。

それは「略奪による蓄積」の名にふさわしい。そして、時代は第一次大戦前とはいえローザが「資本蓄積論」とりわけ第三編“蓄積の歴史的條件”のなかで植民地を中心としたすさまじい略奪の姿を描いたことが現代と二重写しとなるのは自然なことだろう。(それが論理的正しいかは別にして)ハンナ・アーレントはこの部分を激賞した。

ローザにとっては、この二つの蓄積のありかたは弁証法的に関連しているというより、彼女の資本主義観からすれば必然の産物である。

というのも、「資本蓄積論」はマルクス資本論の実現論＝再生産表式の分析から出発してその“誤り”を指摘した。マルクスが資本主義は第一部門(生産財)と第二部門(消費財)の相互関連のなかで、資本主義内部で完結的に実現(市場を形成する)可能だとしたことを否定して自己完結は不可能であり「外部」＝非資本主義的部分を常に必要とするとした。このようなローザの考えが(論理上)誤りであることはすでに公知のことである。

(すでにレーニンも指摘した。ついでながらレーニンはこの「実現論」の“専門家”である。というのも、レーニンはその初期、ナロードニキとの論争が不可欠でありそれはロシアにおいて資本主義が発達し得るかという点をめぐるものだった。従ってこの領域(実現論)での研究、論戦が重要だった。最初期の「いわゆる市場問題について」(全集一巻)や「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」(同二巻)—特にこの著はローザ「蓄積論」の中巻と同様にシスモンディやツガン・バラノフスキー等を批判の対象としている。

更についでにローザ、レーニン関係はこの実現論—ひいては帝国主義論、また民族問題、自決権にかんする論争—レーニン「ユニウスの小冊子について」、さらにローザの「ロシア革命論」での農業問題やいわゆる“代行主義”批判のレーニン批判がありいわば相互に“かたき役”のようにみえるが、レーニンのローザ追悼の例の「…驚であった」だけではなく最近読んだ「第一次大戦と社会主義者たち」(岩波、西川正雄)には次のようなローザの手紙が引用されている

「昨日レーニンが来ました。今日でもう四回目です彼と話すのは好きです。彼は頭がよいし教養があり、何ともはや不細工な面構えなのですが見ていて好ましいのです」)

「資本蓄積論」のサブタイトルが“帝国主義の経済的説明への一寄与”となっているようにローザはこの自己完結不可能な資本主義が“外部”＝非資本主義的領域を求めて侵略するものとして帝国主義の経済的論拠とした。

マルクスがその本源的蓄積において「非資本主義的生産手段の獲得の過程、ならびに、農民の資本主義的プロレタリアートへの転化の過程・・・ヨーロッパの資本による植民地諸国の掠奪が、産業資本の発生において顕著な役割を演じている」(蓄積論下巻P59)としたがそれは「資本の創世記すなわち誕生時」(同上)の一過性のものであり一旦成立した資本主義はそのような外部を必要とせず自己完結的に「拡大再生産による蓄積」の過程として資本主義を描いていると批判している。

ローザによれば不断に“外部”が必要であり、いわば“不断の本源的蓄積”による「略奪による蓄積」なしには資本主義は生きていけないのである。

D・ハーヴェイも少なくとも原始的蓄積に関してマルクスに弱点があるとしている。「マルクスの想定 of 弱点は、略奪と虚偽、暴力にもとづく蓄積をもはや今では関係のない「原始段階」に追いやってしまっていることだ。」(同上P146)と。

しかし、そもそも経済学なるものが成立するのは資本主義の「物象化」が完成し自然科学の法則とは異なるがグラムシのいう“傾向的法則”として資本の運動が貫徹するからである。即ち「拡大再生産による蓄積」(上向して総過程を含め)が貫徹する過程を論理的に把握するものとして経済学(資本論)はあるのではないのか。それがダメだというならば経済学なるものは成立せずある種の歴史(主義)としてしかないことになる。

マルクスも「資本論」で“近代植民地”に簡単に触れているがそれはマルクスが好んで使用した言語からすれば“その詳細はここ＝資本論では考察外であり別の各論の領域である”ということになろう。現にマルクスはインド論その他で資本主義の略奪のすさまじさを描いているではないか。ハーヴェイのように二つ(拡大再生産と略奪による蓄積)は弁証法的だといったとしても二元論だろう。(私も現在の情勢を言うときこの二元論はわかりいいので説明に使用しあるいは“ローザの考えは論理的には誤っているが歴史的には正しい”と言ったりするのだが)ともあれローザのこのような考えが現在の新自由主義の資本の横暴の中でシンパシーを生み出すのは理のあるところであろう。

また、グローバリゼーションの時代にフィットするものでもある。ウオーラスチンの世界システム論やそれを援用した途上国からの従属論、あるいは後藤道夫や渡辺治たちの帝国主義論(植民地論)とも相通じるものでもある。

帝国主義の把握についてはいうまでもなくヒルファールディングーレーニンの系列が他方にある。これはまさに「拡大再生産による蓄積」を軸としたものである。

この蓄積の結果として独占体が成立し、信用(銀行、証券)と結合することによって“金融資本”が成立する。この金融資本の運動として資本輸出、植民地ETCがあり再

分割戦としての帝国主義戦争。

そしてこの金融資本の運動の一環として「略奪による蓄積」も(一元的に)包含(説明)可能である。具体的歴史において純粋資本主義なるものは存在しない。様々なウクラードの混合物である。しかし、基軸となる支配的生産様式(この場合資本主義)は他の領域を商品経済従って貨幣経済に巻き込み従属させそれを解体しすべてを拡大再生産に利用する。

(Ⅲ)

直接的には第一次ロシア革命(1905年)に際してそれが新しい時代(帝国主義段階)の新たな革命(の時代への突入)であることをいち早く、明瞭に理解したのはローザだったであろう。そして先進資本主義国での革命の諸条件(かりにそれを“グラムシ的問題”と呼ぶとして)を提起したのもローザをおいてなかった。

「ロシアのプロレタリアートは、1848年と1907年とのあいだの半世紀以上にわたる資本主義の発展が全体として、ブルジョア階級国家の創世記に位置するものではなく、むしろ、すでに始まった終末の序曲をなしていることを、自己の行動によって示せねばならぬ。さらに、ロシア革命は、19世紀における一連のブルジョア革命のなかでの最終行動ではなく、むしろ、新たな系列を創るべき未来のプロレタリア革命の先触れであり…」(選集2、P71)と。

「今日のロシア革命は、こうして、絶対主義ロシアの特殊な問題の中に、同時にインタナショナルな資本主義の発展から来た一般的問題を実現しており、ふるいブルジョア革命の最後の継承者であるというよりは、むしろ、西ヨーロッパでこれからはじまる一連のあたらしいプロレタリア革命の先駆者であるというべきであろう。ブルジョア革命が弁解の余地がないほど遅れてしまっているために、かえって、このもっとも立ち遅れた国がドイツそのほかのもっとも進んだ資本主義諸国のプロレタリアにたいしてこれからの階級闘争の道筋と方法を教えているのである」(P242)と。

なるほど「革命的であった」頃のカウツキーも「権力への道」を書いた、トロツキーもパブルスとともに「結果と展望」でロシア革命がブルジョア革命ではなく「最小限綱領と最大限綱領の区別をしない」プロレタリアが主体となる永続革命であることを主張した、レーニンもまた「二つの戦術」でプロレタリアートの“ヘゲモニー”をいった。

しかし、上記のようにいわば世界史の発展段階とセットにしてロシア革命を位置づけたのはローザである。そのことを可能にしたのは、ローザの才能を別にするならコンミュンの敗北によって革命主体の中心が、(ビスマルクによる資本主義の成長とセットで)フランスからドイツ(社会民主党)に替わるその中心地にいたことによるだろう。レーニンはロシアという“辺境”の一革命家であり当事者の一人ではあっても全体を眺望する立場になかった。

アイツァク・ドイッチャーがいうところの“レーニンは天才の領域にたっし”総体を眺望するのは(=第三インターを展望するのは)1914年の大戦とその中での第二インタ

一の崩壊を経験しその中から、帝国主義論を書き、国家論ノート(「国家と革命」)を書き、ヘーゲルを熟読(哲学ノート)することによってである。(ついでながら一帝国主義論、国家と革命がこの時期に準備されたことは誰でもわかることだろうが、私は哲学ノートがこの時期にあることの意味が不明だった。極端に言えば大戦がはじまったこの時期に哲学なんぞやるのかと。思うにレーニン第二インターを蝕んだものが資本主義観や国家観だけではなく自然成長的、客観主義的、実証主義的即ち弁証法を喪失したものの考え方にもあることに思い至ったのだと今は了解する。もっとも、友人表三郎を含めてこの実証主義的傾向の源流をエンゲルスにさかのぼろうとする考えには疑問。勿論グラムシもいうように“実践の哲学”(マルクス主義)の第一バイオリン(マルクス)と第二(エンゲルス)に違いもある。

グラムシは婉曲にエンゲルスを批判しており、ジョルジュ・ソレルはあからさまに批判している。両者ともクローチェとアントニア・ラブリオーラから強い影響。

このような新たな時代、プロレタリア革命の幕開けとともにその戦術をめぐっても大論争が開始された。それがマッセン(大衆)ストライキである。「大衆ストライキ・党および労働組合」(選集2)が書かれる。

「ロシア革命が以上の論拠(大衆ストライキはアナキズム、サンジカリズムの戦術—サンジカリズムの理論的指導者ジョルジュ・ソレルの「暴力論」(岩波文庫・今村訳)のゼネスト＝神話を想起—だという考え)に根本的修正を加えるに至ったのである。ロシア革命は階級闘争の歴史の中で、はじめて大衆ストライキの観念や、さらには一ゼネラルストライキの観念を現実に華々しく実らせた、労働運動の発展に新世紀を開いた。(P174)それは政党や組合によって「抜け目なく考案された策略や手段ではなく、プロレタリア大衆の運動方式であり、革命の中のプロレタリアートの闘争の現象形態である」(P210)

そしてそれは決してロシアだけの特殊な形態ではなく普遍的な“革命の現実性”の時代のものである。「大衆ストライキが絶対主義から生まれたロシア特有の産物などではなく資本主義の発展と階級闘争の現段階から生じたプロレタリア階級闘争の一般的形式である。」(P241)

だが、ローザは、先進国の状態、条件を理解していた。「たしかに、政治闘争と経済闘争が、分離したり、それぞれ独立に行われている現状は、歴史的に規定された議会主義の産物である・・・ブルジョア社会の平穏で「正常」な過程の中では、経済闘争のほうは、個々の企業や個々の産業部門のなかの多数の個別的な闘争に分散し、政治闘争のほうは、直接行動という形で大衆自身が行うのではなく、ブルジョア国家の形態に即応した代議制の方式で」(P248)と「民主主義の発展」が革命側の経済闘争＝労働組合、政治闘争＝政党による議会政治という分業と平和主義的墮落の根拠となっていることをいち早く理解していた。

しかし、革命的情勢はこのような労働組合による経済闘争と政党による議会主義政

治という二元的分離をなくし「経済闘争は政治闘争の一つの結び目から次の結び目への媒介者であり、政治闘争は経済闘争の土壌を豊かにする…この両者の統一体こそ、大衆ストライキに他ならない」(P215)そして、その担い手は「プロレタリアートの階級闘争の力の源泉は、中核に当たる組織労働者ではなく広範な周縁部の革命的プロレタリア層なのである。」(P234)

さらに、ローザはフランス大革命—ドイツ3月革命(フランス2月)—ロシア革命という一連の時代を画した革命のサイクルと資本主義の発展段階(およびそれに規定された階級闘争の段階)との関連を明確に理解していた。(P241~242)

私も、先に述べた「ドイツ革命の敗北とローザ」のなかで資本主義の発展段階と革命運動のサイクル—フランス大革命—1848年2月革命—1871年パリコンミュン—ロシア革命を位置づけその中でのプロレタリアートの成熟と時代に対応した戦術を論じてマッセンストライキの意味を述べておいた。

そして結論的に「ローザ・ルクセンブルグは、現代革命が日程に上ったことを理解したが、憎むべき統一の伝統を破ることをしなかった。それを破った時、スパルタクスは、彼女の意に反して。いわば永久革命型に逆戻りすることによって権力に粉碎され、ドイツ革命の流産とともに、彼女の死体は、ランドウエア運河に流されたのである」と書いた。

(IV)

ローザが初期的に見、やがてグラムシが意識的に取り上げた西方、さらに進んだ現代の高度先進資本主義国での革命の条件や主体は何か—このような大上段の問に対して答える能力はない。いくつかの問題意識だけを述べる。

ハーヴェイも述べているように1973年以降階級闘争は大きく変貌した。

ケインズの福祉国家の中で、資本主義のいわば「拡大再生産による蓄積」に対応する賃上げや社会保障制度の拡充を中心とした労働組合—それはまた、民主主義の拡充や、反戦闘争でも社共とともに中心であった—は中心的役割を担っていた。

その意味ではプロレタリアートは存在した。だが資本主義の高度化のなかでの第三次産業の比重の増大(サービス労働)、産業労働者の減少また独占大企業を中心とする労働組合の体制内化(またそもそも組織率の大幅な低下)によってプロレタリアートの「再定義」が必要になった。あるいはそもそも労働者として規定するのではなくネグリにならってマルチチュードと規定する考えも広範にある。反体制的運動も労働組合主体から、“新しい社会運動”や特に社会主義の崩壊と新自由主義の展開の中では「略奪による蓄積」にたいする反グローバルなポストモダンな運動と呼ばれるものが登場し発展した。

労働者階級と呼ばれる概念は捨てられるのか？かつてのプーランツァスのように労働者階級を産業労働者(直接的に剰余価値を生み出す労働者)に限定しあとはプチブルと規定する考えがある。しかし、マルクスがすでに商業資本とその労働者につい

述べているように、商業資本が直接的に剰余価値を生み出すわけではないが資本の回転をはやめ（それは剰余価値生産に逆比例する）また、規模の拡大によって生産性を高めることで剰余価値生産を拡大し剰余価値の配分を得る、そして傘下の労働者に不払労働させることで利潤を得る。かくてその傘下の労働者も賃金労働者である。

産業資本から分離し商業資本として確立する一原理的には平均的利潤率形成の運動に参加する一に応じてその傘下の労働者はプロレタリアになる。このような原理、プロセスは他の産業、情報産業であれ何であれ働くであろう。たとえばIT技術者もその初期には希少価値があったとしても、それが普及し産業として確立するに応じてただの賃労働に転化するだろう。

労働者階級を再定義するとき、資本論から学ぶ二つのポイントがあると私は考えている。

第一は“労働力の価値の労賃（労働の価値）への転化”である。よく言われるように労働の価値は誤り（ブルジョア的外皮）であり正しいのは労働力の価値であると。事実マルクス自身がエンゲルスあての手紙でこの区別の重要性を説きスミス、リカードの古典経済学とマルクスを分ける分水嶺としてこの点を提示した。（労働と労働力の分離は「要綱」—1857、8年を経て「剰余価値学説史」—1863の間に確立した）しかし、労働の価値は虚偽（の意識）であるというのは誤りである。（ないしは事実ではあっても真実ではない）労働力の価値の労賃への転化の過程はいわゆる“労働の形式的包摂から実質的包摂”の過程である。

「資本論」一巻二編4章の“貨幣の資本への転化”での貨幣と労働力の交換は“単純流通”のものであり等価交換歴史的に言えばマニファクチャーの段階ではまだ労働者が道具（機械ではない）を使用する労働者の“主体性”が残存していた。機械制大工業になるときはや労働者は機械に包摂される“客体”に転化した。この時資本の自己増殖が開始された。つまり労働力は資本の一部としてのVに転化した。これが労働力の価値の労賃への転化の意味である。それは単に“虚偽”ではなく実質的包摂という“実体”がある（実体のない本質の顕現はヘーゲル主義だ）。

第二のポイントは先に述べた商業資本下労働者の（より普遍的には生産的労働以外の労働者）プロレタリア化についてのマルクスの論理である。

マルクスはこの問題を流通を扱う第二巻ではなく総過程の三巻の第四編で論じている。剰余価値の利潤への転化を経て競争を通した利潤の平均利潤への転化ののちである。ここで初めて単に生産的労働（者）以外の全産業下の労働者が労働者として規定し得るのである。更にネグリ主義者（全体でないにしても）のために言っておこう。いわゆる「情動的労働」—例えば介護労働者—この労働者階級の「再定義」はもっと原理的にも実態的にも深める必要がある。

ローザは先に引用したように「運動の中核は組織労働者ではなく周縁部の未組織労働者」

働者である」と述べている。

それは、現在的にはハーヴェイがほかならぬローザから借用した二つの蓄積のタイプに対する闘争の問題と関連する。先にも述べたように、略奪による蓄積は、拡大再生産による蓄積の延長上に、ないしはその行き詰まりの中から（つまりは利潤率の傾向的低落のなかで）生じたものである。ハーヴェイが略奪として例示している環境破壊、サービスの私有化、土地からの排除等、もあるが最大の略奪は非正規雇用（同一労働同一賃金でない“不当な”搾取）であり金融資本による価値切り下げによるものつまりは拡大再生産にかかわるものである。

我々はローザとともに運動の中核が少なくとも当面マージナルな部分であることに同意する。そこから出発すべきである。同時にそれは拡大再生産による蓄積の中心部に波及すること波及させねばならないことを展望しよう。